

コ ラ ム

研究評価と論文査読

研究に携わっていて常々心痛むこととして、研究資源を社会に還元しているかである。言い換えれば研究成果への評価にあるといえる。研究成果にはいろいろな形式のものがあるが、一般的には学術論文の生産となろう。これらのことを議論するに助けとなる資料が最近提供されている。1)梅棹忠夫:情報管理論(1990), p. 82 [岩波], 2)小岩昌宏:学術雑誌のランキング(日本金属学会会報, 28(1989), p. 987), 3)山崎茂明:学術雑誌のレフェリーシステム(科学, 59(1989), p. 746. 1)ではレフェリー制が正常に機能しているかぎり、論文をたくさん書いた人が、業績をあげたと評価されるのは当然のことであり、「論文は量ではなく、内容だ」の主張ははなはだ疑わしいと述べている。レフェリー制のしっかりしている雑誌であれば、評価に値する論文が多く掲載されるのも事実であろう。しかし、現実にはどうであろうかと、より定量的(数字で示されるからそうよぶ)に雑誌のランキング付けをしている、ショッキングな内容が2)に示されている。さらに、専門雑誌のレフェリー制のあるべき姿について厳しい注文をつけているのが3)である。

研究評価をする必要性についてはほとんどの人が認めることは確かであるが、その方法についてはっきりと述べられた例は我が国ではないといってもよい。評価する方も、される方も同業者仲間であることから密室的になる危険性がある。梅棹氏は大胆にも氏の研究所の研究員各人の生産した論文のページ当たりを要した経費を算出した。研究が自立性の高い職業であるならば、プロスポーツに見られるように従事している者のランキングがあつてしかるべきであろう。研究者にとって厳しい環境になったと同時に評価が公開されることになり、本音の時代の到来と捉えるべきであろう。しかるに研究評価において専門雑誌の地位、その査読制度の品質の重要性は今後ますます増してくるであろう。掲載論文の質を上げつつ、量を増していくことは、専門雑誌に望まれるところであり、我が「鉄と鋼」ではこの基本方針は維持されていると確信している。

さて、1), 2)を参考にして各機関、個人のポイントを計算してみてもいいでしょうか。いや、そんな暇があったら論文を書きなさいと言われるかもしれませんので注意しましょう。

(金属材料技術研究所筑波支所 石川圭介)

編集後記

「新しい耐熱鋼」特集号ができあがりました。

「最近の高強度耐熱鋼」をテーマとした討論会(座長:菊池 實)が開かれたのは昭和63年度の春季講演大会でありました。ご記憶の方も多いと存じます。エネルギーの高効率利用を目的とした、超超臨界圧火力発電プラントの実用化にあたっては「耐熱鋼の高強度化」が重要な課題の一つであります。わが国においては、過去十年間、タービンロータ及びタービンブレード材として、新しい高クロムフェライト鋼あるいは析出強化型のオーステナイト鋼の開発研究が活発に行われてきました。このため討論会においては活発な質疑応答が行われました。しかし、その後、論文として掲載あるいは投稿されたものは非常に少なかったように思われます。欧米の規格の枠を超えた合金開発が「低合金耐熱鋼の高強度化」を対象として行われてきたことが、わが国の火力発電プラントが世界をリードする

ようになってきた原因の一つであります。したがって、材料の観点から書かれた論文あるいは技術報告が多く投稿されることは非常に価値があり、また時期を得ていると思われました。その結果、投稿していただいた論文、技術報告及び解説の数が20を超え、小特集号を特集号に変更することとなりました。「耐熱鋼及び耐熱合金」の分野においては国家的なプロジェクトを含め、10年を単位としたようなテーマの数が今後、増加するものと思われます。複数のテーマを対象として研究が行われている昨今、特集号を企画することの価値は非常に高いと感じました。

ご投稿いただきました著者の方々には短期間の再読み直し、修正に御協力いただき、審査を順調に進めることができました。今後とも多数のご投稿をいただければ幸いです。(T.M.)